



TITLE:

社會黨の農民獲得運動(二・完)

AUTHOR(S):

河田, 嗣郎

---

CITATION:

河田, 嗣郎. 社會黨の農民獲得運動(二・完). 經濟論叢 1928, 26(2): 290-315

ISSUE DATE:

1928-02-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128794>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號二第

卷六十二第

行發日一月二年三和昭

## 論叢

損益勘定に關する一考察

法學博士

上野道輔

法人重複課稅立法の分析

法學博士

神戸正雄

利潤成立の機構

文學博士

高田保馬

社會黨の農民獲得運動

法學博士

河田嗣郎

長崎貿易に於ける銅及銀の支那輸出について

文學博士

矢野仁一

## 說苑

重農學派の純收入論

法學士

山口正太郎

## 雜錄

Fairplay 誌の批評に應ふ

經濟學博士

小島昌太郎

徳川時代の漁民騷動

經濟學士

黒正巖

紐育倫敦兩資本市場の爭鬭

經濟學士

松本佳三

營業收益稅の改正法案

經濟學博士

沙見三郎

## 法令

商工會議所法施行令

## 社會黨の農民獲得運動 (二・完)

河 田 嗣 郎

### 三 國際勞働協會の農政見地 (其二)

前に述べたブリュッセル大會に於ける農政問題に關する決議は、國際勞働協會の態度を明かにしたものであつたが、その決議は勞働者中の或一派の者と市民的なる社會民主々義者との心を失ふ結果となり、此等の人々と國際勞働協會一派の人々との間には、大きな溝が出来ることになつた。然るに次で催されたバーゼル大會に於ては更に明白に協會派の態度が示され、それは明かに共產主義の主張だと見られる外はなかつた爲に、茲に愈々兩派間の決裂は縫ひ合ふことの出来ないものとなつてしまつた。

とはいふものゝマルクス主義の人達は、決して農民を獲得することの必要を感じなかつたわけではなかつた。特にリーブクネヒトの如きは、この點に關しては確信を有つて居たやうである。彼は革命を行ふ爲めに農民を必要とするとは考へなかつたが、然し若し農民が之れに反對して居

ては革命を支持することは出来難いものだと考へて居たのである。

バーゼル集會後ベールも亦其の農政意見を公にすることになつたが、彼の見る所も勿論マルクス主義的見地に立脚したものであつて、小農業の没落を信じた。即ち獨逸特に中部及南部に於ける小農地は、分割相續の結果として段々に小さくなり、其等の小農地は何物よりも先づ最も肥料に缺乏して居る。家畜を飼つて肥料を得んが爲には農地が狭くて困るし、肥料を買はんには金がない、其當然の結果は收穫の減少であると思つた。斯くて小農民は副業として家内工業に従はなければならぬが、それは永い間には農業と兩立し得ざるに至り、茲に農民は純粹な工業労働者に化してしまふ。そして彼れの所有地は資本主の買取る所となり、資本主はこれを大農業の下に經營することゝなると述べて居るのである。

尙又その述ぶる所に依れば、貧窮な小農民は段々に亡滅して其代位には從來の中農民が立つことになるが、此等の人々は機械を用ゐることも出来なければ、改良せられた施肥の設備も有たない。それをしやうとすれば金を借らねばならず、借金を負ふて居て一朝不幸に會したり、借金を取立てられたり凶作に遭つたりすれば、忽ちにして没落してしまふ。其宅地すらも資本的大地主の有に歸してしまふ。

斯かる状態を救ふべき道としては、たゞ國有地や世襲領や寺院領などの上に大きな生産組合を

組織する外はない。又國家は法律を以て小農地を合併しそれを共同的に使用經營する道を定めなければならぬ。大地主等は、此規定の結果として必要なる勞働力を得る道がなくなり自然的に其所有地をば共同的なる使用の爲に國家に提供するを餘儀なくせられるか、然らざれば國家はこれを徵收してしまはなければならぬとペーベルは主張するのである。<sup>17)</sup>

此によつて觀れば、從來社會主義者は先づ多くは大農地の徵收を説いて居たのに反して、ペーベルは小農業が最も時代後れのものなれば、先づこれを取除くことにせなければならぬと見て居たやうである。そして彼れの見地は、一八七〇年代に在つては勞働者團體の人々の多數者の頭を支配したやうであつて、農民獲得の爲に多く積極的に行動することなく、勞働黨は工業勞働者の團體たるを以て満足して居た。

一八七〇年にはアイゼナッハ派の社會民主黨はスツットガルトに協議會を催したが、其折ペーベルは報告者としての任に當り、右に示す所の彼の意見を陳べた。そして彼は農業勞働者を社會黨の陳營内に引入れる必要ありと爲し、其目的を達する最も容易なる道は彼等に個人的なる利益を供與することに在りとした。即ち自作農民は國民黨が味方に取らんと努めて居るが、社會黨としては農業勞働者を獲得することに努めなければならぬと主張したのである。

協議會はペーベルの提議に基いて左の如き意味の決議をした。

17) „Unsere Ziele.“ Berlin 1893. 10. Aufl. S. 43—(zit. ebenda)

生産上の要求と農學上の法則の適用とは農業に就いて大經營を必要とし、又現代の工業に於けると同様に機械の使用と農業労働者の組成を必要とし、更には又一般的に現代の經濟的發展は農業上大經營に向つて進み行くものなるを考慮し

右の事情に従て農業に在つても大工業に於けるが如く小及中所有者が漸次に大所有者の爲に壓倒せられる勢あり、農業人口中の大多數者の貧窮と從屬關係とは、少數者の利益の爲に、常に増加して止まず、然かもそれは人道と正義との法則に反するものなるを考慮し

土地の生産的性質は元來何等の勞働を要しないに拘らず、あらゆる生産物とあらゆる有用物の原料を成すものなるを考慮し

協議會は左の見解を表明するものである

現代社會の經濟的進化は次のことを社會的必要事となすであらう。即ち農地を社會的所有に移し、土地はこれを科學的方法に於て使用し勞働の收益をば契約的に規定したる所に從て組合員の間に分配する所の農業組合に國家よりして貸與へることこれである。

土地の合理的にして科學的なる使用を可能ならしむる爲に國家は適當なる教育設備を爲すことに依り、必要な知識を農業に従事する人々の間に普及せしむる義務あるものとする。<sup>18)</sup>云々

この決議は其前半に於ては曩のブリュッセル大會の決議と殆んど同一であるが、後半に於て現存の國家に對して要求する所のあつた點が特色を爲すものと謂はねばならぬ。

スツットガルトの大會については一八七五年に開かれたゴータ大會が著明なものであるが、この大會に於てリープクネヒト及ベーベル一派の所謂アイゼナッハ黨とラサール及其後繼者たるシユワイツァー一派の社會黨とは合同してしまつた<sup>19)</sup>。そして其大會の決議に於ては、社會問題を解決する爲めに、勞働者の民主的なる統御の下に、國家の補助を受ける社會主義的な生産組合を組織すべしと要求せられ、その生産組合は工業と農業とに對して、其中から全勞働の社會主義的な組織が発生し得べきだけの規模に於て造り上げらるべきものとせられた<sup>20)</sup>。

#### 四 獨逸社會主義運動發展期の農政見地

一八七八年に布かれたる社會主義鎮壓令(Sozialistengesetz)は、獨逸の社會主義運動に對しては十二年間の久しきに涉つて大いなる障礙を爲した。然しそれは一八九〇年に廢止されることになつたものだから、社會主義運動は再び大いに活氣を呈し、同年二月二十日に行はれたる帝國議會の總選舉には社會黨の票數百四十餘萬と註せられ、鎮壓令公布以前に比し正に三倍に増加し、社會民主黨は議會に於ける最有力の黨派となつてしまつた。

19) 拙著『社會問題體系』第三卷五九頁

20) Cohnstaed, a. a. O. S. 107; David, a. a. O. S. 33.

けれども其黨員の大部分は工業無産者たるに外ならず、農民にして黨員たるものは少數の農業勞働者に過ぎないで、自作農民等は殆んど皆無に近かつた。此事は社會民主黨内部に於ても大なる缺陷と考へられざるを得なかつた。即ち同年ハルレに開かれたる協議會に於ては、一代表者は此點を痛歎し『眞實の意味に於ける社會民主黨的な自作農民は一人も居ないことを告白せなければならぬ。從來吾々の運動は此の方面に於ては殆んど何等の收穫を伴つて居ないのであつて、それは一つには經濟上の事情に因るが、一つには又今日に至るまで吾々が其方面の運動をするについて必要とする規定をば吾々のプログラム中に有たなかつたことに歸因する』といふ意味のことを述べたやうな次第である。そして其人は、たゞ口先ばかりの議論を以て農民を獲んとすることなく、實行を以ても亦農民を援助するに努めねばならぬ。即ち從屬的な農民の境遇を立法に依る實際的行動を以て何程かでも和らげてやらねばならぬと主張した。<sup>21)</sup>

この主張に對しては多くの共鳴者があつたが、或者はプログラムの中に欠陥があるといふよりも、運動の行はれるについて其指針となるべき文献の缺けて居ることが、大いなる缺陷だと指摘した。この點については頗る同感者が多くて、宣傳ビラや定期刊行物やパンフレットの供給の行はれんことの必要が痛説せられるに至つたのである。<sup>22)</sup> 併しともかく社會主義鎮壓令の撤廢以後は農村に對する實際的宣傳運動が俄かに活氣づいて行はれるやうになり、何となく一陽來照の觀が

21) Cohnstaed, S. 132 ff.

22) ebenda



あつた。

一八九一年には有名なるエルフルトの大會が催されたが、當時マルキシストの勢力は甚だ盛であつて、其際發表せられたるプログラムは實にマルクス主義の神髓に觸れたるものであつた。そして其れは固より獨り農業に關するものではなく、廣くあらゆる産業に妥當すべき一般的なものであつた。其大要は次のやうである。<sup>23)</sup>

市民的社會の經濟的發展は、勞働者が其生産用具を所有することを以て基礎とする所の小經營の没落を必然的に將來するものである。其發展は勞働者を生産用具から分離し無産者に變化せしめる。其間生産用具は資本主と大地主との比較的少數なる人々の獨占に歸してしまふ。

この生産用具の獨占化と相並んで巨大なる大經營に依る分散せる小經營の壓迫が行はれ、器具は機械に進化し、人間勞働の生産力の著大なる進歩が行はれる。併し乍ら此變化に伴ふあらゆる利益は資本主と大地主とに依て獨占せられる。無産者階級と没落に傾ける中層階級（即ち小市民と自作農民）とに對しては、それは彼等の生存の不安と、貧困と、壓迫と、奴隸化と墮落と搾取との増加を意味する。

即ち茲に示される所はマルクス主義的な一般見地に依る社會的經濟發展の徑路を示すに過ぎないものであつて、其一般原則が農業にも當嵌まるものなれば、小經營を以てする自作農業は漸次

23) Protokoll des Erfurter Parteitage, Berlin 1891.

衰亡に歸して農民は土地所有を失ひ、段々に無產者化してしまふ。そして大地主が段々に土地を兼併して經濟發展に伴ふ利益はこれを吸盡してしまふといふのである。さればその示す所は從來國際勞働協會其他に於けるマルキシストに依て説かれたる所と其根本に於て異なる所なく、依然として其見地が持續せられて居るのである。更に其示す所によれば

生産用具の私有制は以前は生産者に其生産物に對する所有を保障する手段であつたが、今や自作農民、手工業者及小商人を褫奪し、そして非勞働者(資本主や大地主)に勞働者の生産物の所有を得せしめる手段となつてしまつた。たゞ生産用具(土地、鑛山、原料、器具、機械、交通設備)をば社會的所有に移すこと、商品生産を社會主義的にして社會の爲に社會に依て經營せられる生産に移すこと、が次の効果を齎し得る。即ち大經營をとして社會的勞働の常増加する収益能力とが、從來搾取せられたる階級に對して貧窮と抑壓との源たりしものから變じて最高の幸福とあらゆる方面に渉る調和ある完成との源に化するといふ結果を齎することになるのである。

茲に示す所について見るも、其言ふ所はやはりあらゆる生産用具の社會有化といふことであつて、之を農業に關していへば主として土地の私有制を廢してこれを社會有と爲すことに存する。從て此點に於てもエルフルト大會の示す所は、從來種々の機會に公にされたる所と殆んど多く異

る所はない。

要するにエルフルト、プログラムに依る農政見地は従前に比して殆んど何等の進歩を示しては居ないが、たゞ從來よりも一層明確に又一般論的にマルクス主義的見地が公にされ、農政問題も他の諸産業方面のものと一束にして一刀の下に裁断された観がある。但し農業改造の計畫としては従来屢々言はれたる生産組合のことは棄てゝ顧みられなかつた。

當時獨逸社會黨の人々は右に述べるやうな社會的進化は政治的闘争の形に於て實現するものと思つて居たのだが、其の政治的闘争に於ては農民の援助を得ることを希ふ者なく、教練の不足な又武裝の悪い農民群衆は勞働者軍の列中にたゞ不安定を寄與するに過ぎないものと見て居たやうである。

エルフルト大會の際には、同年の夏ファルツの社會民主黨がその第二回の地方的集會を催した時の希望に基き穀物賣買を國營とすべきやう帝國議會に提案すべしといふ議案を出した。<sup>24)</sup> この提案は勿論多數の容るゝ所とならず、それは國家社會主義的だとせられた。若し國家といふ意味を社會的共同團體といふ意味に解するならば、社會主義は國營を行ふものといつてよいが、帝政的な當時の國家を其儘に國家と見て、それがある業務の經營をするのを國營といふのであるならば、それは大會社が事業經營をするのとは本質に於て異なる所がない。斯かる意味の國營には社會民

主黨は反對だと考へられたのである。

それは兎に角としてエルフルト大會以後は獨逸の社會民主黨は明白に勞働者の政黨としての色彩を發揮するに至つた。然かもそれはたゞに一部分の勞働者のみの政黨ではなくて、總べて働者の全般的な結合體となることを欲したのである。然るに茲に大いなる妨になることは、エルフルトのプログラムを以てしては其儘ではどうしても自立農民の心を捕へることが出来なかつたことである。農民といへども無產者の如く考へ無產者らしい心情にさへなれば、社會民主黨員としての立派な資格を得るわけだが、其れがとても六ヶ敷いことであつた。農民の境遇は工業勞働者に比して決して良くはないに拘らず、否實際に於ては却つて劣つて居るやうな有様なるに拘らず、其心狀に至つては自ら賃金勞働者と同列の者と考へるを潔しとしないで、一段優れたものであると思ふことを奈何ともすべからざる有様であつた。

カウツキーは一八九一年のエルフルト協議會後に *Erfurter Programm* を刊行したが、其中に於て彼は自作農民は其の所有地を褫奪せらるべきものでない旨を説いて居る。なせ褫奪せられないかといへば、社會主義の傾向は勞働者をして其必要とする生産用具の所有を得せしむることに在るのだから、從來の所有を一度取り上げて又再び新たに與へるのは、無意義な手數に外ならぬからである。けれどもカウツキーは決して小自作經營が從來のやうな道方で榮えて行くものとは信

じて居ない。彼の見る所によれば、手工業者や自作農民をば生産者として其の時代後れな經營方法を維持する状態に於て助けて行くといふことは、經濟進化の徑路に撞着するもので實行不可能のことである。そして又手工業者や自作農民に對して彼等の小經營が其生命を維持し得べきやうな施設を爲す見込ありと思はしめることは、決して彼等の利益を了解する所以でない。さうではなくて却つて彼等に到底實現することの出来ない幻想を懷かしめ、彼等の利益を最もよく代表すべき正當の道筋から邪道に誘ふことになると思へて居る。

斯かるマルクス主義的な見地に對しては、併し乍ら、社會民主黨全部の人々が残りなく賛成したわけでは無かつた。一部の人々は随分反對意見を抱いて居たのであつて、就中バイエルンの議會に於ける社會民主黨所屬者の間には、自作農民をして其の境遇を何程かでも堪え易いものたらしめ、彼等の大多數が無産階級に落ち行かんとする危険をば出來ることなら免れさしてやりたいものだ、其爲には能ふ限りのことをして行きたいといふ希望が述べられた。<sup>25)</sup>

## 五 農政問題の最高潮期

上に述べた所に依て明かなやうに、一八九〇年といふ年は、獨逸社會黨の對農民運動史上に於ては一新時期を劃する年であつた。即ち此時期に於て一段の活氣を以て農村に對する社會主義運

25) „Die Sozialdemokratie im bayerischen Landtag 1893-1899.“ Nürnberg 1899, S. 50 (zit. durch Cohnstaed, s. S. 151)

動は行はれることになつたのである。然るに其後に於ける運動の成績はどうか思ふやうにゆかないで、次にキヨルンに開かれた社會民主黨會議の際には、頓みに意氣銷沈に陥つてしまつて居た。そして人々は農民獲得運動を幾らやつてみた所で、所詮徒勞に終る外はないとして稍々匙をなげたる形であつた。

一八九四年に開かれたフランクフルトの會合に於ては、農業問題と社會民主主義とが議題となりシーンランク Dr. Bruno Schönank ヲフォルター Georg von Vollmar が報告の役をつとめた。其報告に於てシーンランクは陳べていふやう、小農民を獲得することが出来ないといふのは正しからざる結論である。人々は、小農民が小所有地を所有する限りはたとへそれが形ばかりの所有であるにしても吾々社會黨には獲得し難いしろものだと言ふけれども、私はそうは思はない。自作農民の多數はたゞ面を被つた無産農業労働者に過ぎない。彼等は資本と高利貸と大農業經濟とに依つて既に絞め上げられて居て、吾々の手に入れることの出来るものになつてしまつて居る。彼等は恰も吾々が小商人を手に入れることの出来たやうに手に入れ得べきものであると述べた。そして又いふやう、若し吾々が農民獲得の道に於てたゞ彼等を中心せしめ得たに過ぎないとした所で、それで十分或事を爲し得たとせねばならぬ。されば吾々は一の農政プログラムを必要とするのであつて、通俗化されたエルフルト、プログラムを補充し擴張せねばならぬと主

張した<sup>co)</sup>

フォルマールも大體同様な意見を陳べたのだが、彼は先づ社會民主黨の從來の農業政策について概評を試みた。彼の觀る所によれば從來社會民主黨は、自作農民に對しては彼等が避くべからざる没落の運命に在るを認識せしめ、たゞ社會主義の實現せる彼岸に於てのみ狀態の改善せらるべき憾を與へたに過ぎなかつた。それでは農民が満足しないのは明かなことである。

フォルマールは農業に於ける實際の狀況についても、實狀が従前社會民主黨のこれを豫言したやうには發展しなかつたことを認めた。即ち小農業は大農業の爲めに急速に併吞されてしまふべしとの豫言も、實際はその通りには進まなかつたし、又大きな機械の使用といふ事實も殖へたには殖へたけれど、決定的な革命的な結果を齎すほどのことではなかつた。現時の農業經濟に在つては、大農業は小農業に對して從來社會黨の人々が之を信じたほど卓越しては居ないことが、事實上段々明かになつて來たのであつて、それは穀作に於てもさうであるが、牧畜に於ても同様であり、果樹や野菜類の栽培に於ては特にさうである。要する農業方面に在つては、工業に於けるやうに中又は小規模の事業が大規模事業のために壓倒せられる勢は著明でなく、寧ろ夫等は外部からなる貨幣資本の壓迫を感じる所の方が多大である。従て農業政策論者の多くは、大規模農業はたゞ粗放的なる經營に於てのみ卓越したものであり、然かも經濟上の發展は漸次集約經營に向

ふものなるが爲めに、經營は却つて段々小規模に向ふ傾あるものと結論する次第である。そんな事情なるが爲に、中及小經營や獨立なる自作農や多くの地方に於ては段々狀態の切迫を感じて居り、若し國家の保護の來つてこれを救ふことなくば將來沒落を免れ難い有様にあることが、疑ふべからざる事實なるが如く、同様に又其等が現在に於ては存在して居り、又近き將來に於ても存續し得べき可能性を有つて居ることも事實である。されば社會民主黨としては、差當りどうしても此等の自作農民のことを考へて其獲得の道を構せなければならぬと述べた。そして社會民主黨としては自作農民の保護を行はなければならぬと主張したのである。<sup>27)</sup>

このシェーランランクとフォルマールの報告に基き、大會の決議は爲されたが、其決議に於ては、社會民主黨として最も熱心に農政問題の爲に盡力せなければならぬ必要が認められ、其の前提條件としては先づ農村の實際狀態について立入つて智識を得るの要ありとせられた。そして農業問題は、社會問題中の重要問題として、たゞ土地が他の生産用具と共に、生産者即ち現今資本に奉仕して土地を耕しつゝある所の賃傭労働者及小農民等に返し與へられることに依てのみ終局的に解決され得るのである。けれども差當つてのこととして先づ農民と農業労働者との陷つて居る困難なる境涯を改良的な方法に依つて緩和せなければならぬ。從て社會民主黨としての當面の任務は特別なる農業政策上のプログラムを作製するに在りとせられた。そして其の農民保護政



策としては農村労働者の結社権を確定し工業労働者と同地位に立たしむること、労働者保護法を制定し、労働時間、労働条件、労働監督官等の規定を設けて、無制限なる搾取から保護せなければならぬとせられた。<sup>8)</sup>

この決議に於て、農民保護に關する政策の必要が認められ、農村問題の根本的解決は、土地其他の生産用具を農業實際の労働に従事する人々の所有に返すことに在りとしても、當面の緩和策としては、農業労働者保護立法を行ひ又其他の方法を講じて所謂改良主義的なる立場に在る政策なるものをも行ふ必要ありとせられたことは、まことに注意に値する所たらざるを得ない。從來マルクス主義の見地に立つて、つとめて徹底的にものを觀んと欲し根本解決のことをのみ言ふに慣れたる獨逸の社會民主黨が、斯かるやゝ妥協的なる態度に出づるに至つたことは、由來社會主義や共產主義の立場に在る政黨が實地的なる政權に接近するにつれて、いつも生ずる現象ではあるが、また以て農民を獲得せむが爲には、たゞ經濟發展の必然的なる徑路を述べて小農民没落の不可避的なる運命を告げるだけでは所詮其目的を達し難く、又土地國有といふやうな根本的解決案をのみ示して、農民困窮といふ當面の事實を冷眼視して其運命の當然なることを説き聞かすだけでは、到底農民の心を獲ることの出来ない實狀の觀取せられるに至つたのを察するに足る次第である。

然しこの決議に對しては大會出席の代表者中にも随分反對者もあつたのであつて、かゝる決議は社會民主黨在來の立場に反き、階級戰爭の鋒先を鈍らすものであると論難した。當時社會民主黨の事實上の指導者であつた所のペーベルも亦この決議に對しては甚だ快からず思つて居たのであつて、彼は其當時社會民主黨の立場に大いに水をうめる傾向になつて來たことを歎いて居た。彼は當時社會民主黨は其黨員の數こそ大いに増加し量的には大きくなつたが、質的には決して善くなりつゝは無い。黨としては段々日和見主義に傾き從て階級戰爭の熱がさめて市民的な改良主義の見地に地歩を譲る嫌ありとして大いに時狀を憤慨したのである。然し大勢は彼の力を以てするも如何ともすべからず、上の決議は多數に依つて行はれ、又農政特別委員會が組成せられることになつた。

惟ふにこの一八九四、五年の頃は獨逸の社會主義者の間に於ては、最も盛に農政に關する問題の論議せられたる時期であつた。その論争は社會民主黨の機關紙上に火花を散らして戰はされたのであるが、就中代表的な闘士として特筆に値するものは、一方に於てはダヴィッド Dr. Ernst David であり、他方に於てはカウツキー Karl Kautsky であつた。ダヴィッドは農業に關する實際的な技術と經營上の智識からして、農業が工業とは異つた大いなる特性を有することを理由として、工業を本位として立てられたるマルクス主義の一般論的な經濟進化の理法に依る發展の

徑路は、そのまゝには農業には當倅り難きを述べ、農業に在つては小規模經營が大經營に對して中々對抗力を有して居り、從て生存能力を備へて居ることを力説した。即ち彼は農業に關してはマルクス主義の所説に修正を要する多くのものあるを主張したのである。<sup>29)</sup>

之に反してカウツキーは、前にもこれを示したやうに、飽迄マルクス主義の陣地に在つて、勇敢に之を守護しつゝ、ダヴィッド其他の論陣に對して砲彈や銃彈を送ることに怠らなかつた。併し其の論戰の内容について茲に詳論する必要はないであらう。マルクス主義者の立場と見地とは上に色々叙べた所によつて大抵明かにせられて居るから。

## 六 農政委員會プログラムと論戰

曩にフランクフルト大會の析選ばれた農政問題に關する委員會は北部獨逸と南部獨逸と中部獨逸との三部に分れて各々其任務を盡すにつとめたが、就中南部獨逸委員會は最も熱心に事に當り、廣く農業の實狀を尋ぬる爲めにアンケートを行ひ、其調査書類はダヴィッドの手に依て整理せられた。そして一八九五年の五月には各分會とも先に述べたエルフルト、プログラムの補充と擴張との爲めに用ゐらるべきプログラムの案を提出したのである。

南獨逸委員會の提案は主としてダヴィッドの見地に據つたものである。その主旨は大體次の

29) ダヴィッドの所説については拙稿『農業と社會主義』(中央公論第四六四號)中にかなり詳しく述べて置いた。

如きものであつた<sup>30)</sup>

- 一、農業生産に對し國家の進歩的なる施設を行ふことにより國民食糧の計畫的組織を造ること
- 二、公共所有地の賣却を禁止すること
- 三、巨大所有地の收用を行ふこと
- 四、土地所有に伴ふあらゆる特權を廢すること
- 五、土地信用及び全信用制度を國營とし利子の引下を行ふこと
- 六、國有農地を模範經營の設置のために、又地方自治體有地の増加のために、又實物利子に依り自作する者に對する貸付のために使用すること
- 七、農業教育及模範經營の設備を完全にし又普及すること
- 八、貸付地の創設、土地改良、產業組合の建設等のために地方自治體に對し國費の貸付を行ふこと
- 九、公の營造物に於ける食糧給與に必要な農產物を直接に生産者より購入すること
- 十、小作契約をば土地の收益價格及び小作人が小作地に對して爲せる改良費の賠償額とに適應して制理すること

以上の外尙ほ三委員分會の一致せる提案としては、農業保險の國營、森林利用權及牧場使用權

の保持、農業労働者保護、農業官署及農業會議所に關する件等があつた。然かも農業労働者の保護に關してはこれを比較的大規模に行はれる農業に限らんとしたのである。

今この南獨逸委員分會の提案を見れば、其示す所は大抵所謂土地制度改良論者や農業政策論者の要求する所より多く以上には出でないものと謂はねばならぬ。斯くてこれを採用する限り獨逸の社會民主黨はマルクス主義の立場から下りて改良主義の立場に立つことになるものと見なければならぬ有様であつた。

然るに此の分會の提案は他の二分會の提案と共に然るべく組合はされて獨逸社會民主黨の農政プログラムとしての全委員會の提案を作り上ぐるに至つた。そしてそれに依つてエルフルト、プログラムの補充と擴張が行はれたのである。併しそれでは社會民主黨のプログラムとしては如何にも妥協に墮したものであつて、社會民主黨は社會黨から化して農民黨となる譏をも免れ難いやうな有様だつたから、眞實のマルキシストを以て任する人々は社會黨の聖壇を守る爲めに猛烈にこの提案に反對する所があつた。然るにも拘らず農政委員會の提案は一八九五年の七月に公にされることになつた。

果然このプログラムに對しては方々から攻撃の矢が放たれ、社會黨は其本城を棄て、しまつたものと非難された。元來社會民主黨は現存の國家を是認しない立場に在るに拘らず、今や國家の

手中に強大なる經濟力を握らしめるやうな農政方針を定め、公有地を増加し、農業保險の國營を爲し、農業信用を國營とし、其他種々の方面に於て國家が自ら責任を荷ふて農業政策を行ふことにせんとするのは、明かに從來の立場に對して矛盾するものであるとの非難が、方々から表はれて來ることになつた。又從來社會民主黨は自作農業のやうな小農業は經濟進化の理法上當然に大農業の爲めに壓倒されて、其没落は必然的で不可避なものと見て居たのに、今や却つて夫等の自作農民を保護すべしと爲し、それ等及び農業勞働者に國有地の貸付を爲して、自作を行はしめんとするは、從來の主張を裏切るものと謂はねばならぬとの攻撃も盛に爲されて來たのである。

殊に此等多くの非難攻撃は社會主義者の諸所の陣營の中から響き渡つて來る有様であつた。まことに蜂の巢を壊はしたやうな有様だつたのである。

盛なる非難攻撃の中に揉みにもまれた委員會の提案は、愈々一八九五年十月五日のプレスラウ大會に提出されねばならぬ運命となつたが、其所に表はれたものは、よほど形の變つたものとなつて居た。即ち論議の焦點となつた所の、農政にのみ關係した部分はプログラムの中から削られて、別に獨立した決議案として提出せられたのである。其の決議案は、農業上の利益を進め又農業勞働者と小自作農との地位を向上せしむるために、社會民主黨大會は、宣傳運動と公共團體の活動との爲めに供するやう左記諸要求を黨員諸君に推奨するものであるといふ意味の前書を伴つ

て表はれた。そして其左記諸要求として先にプログラム案中に書加へられて居た農政上の諸項が示された。その諸項は南獨逸委員分會の提供したものに據つて居たのである。

この委員會案に對しては大いなる反對意向の動いて居たのは言ふまでも無い。特にカウツキー一派の人々は終に之に對して別に一の決議案を提出するに至つた。其要旨は次のやうであつた。<sup>(31)</sup>

農政委員會から提出せられたる農政プログラム案は排斥すべきものである。このプログラムは自作農民に對して其地位を向上せしむること、從て即ち彼等の私有財産を安固にすることを志し、これに依て彼等の所有權崇拜を鼓吹せんとして居る。それは現時の社會に於ける農業上の利益をば無產者の利益なりと説いて居るが、併し農業上の利益は工業上の利益と同様に、生産用具の所有制の存する狀態の下に於ては、生産用具の所有者共即ち無產者に對する搾取者共の利益たるに外ならない。尙又農政プログラム案は搾取者たる現存の國家に新たなる權力を賦與し、それに依て無產者の階級戰爭を困難ならしめんとして居る。更には又案は資本制的なる國家に對して、無產者が政權を獲得したる後の國家のみが能くこれを實行し得るが如き諸任務を課せんとして居る。

尤も社會民主黨大會は、農業にはそれ特有なる、工業に於けるとは異なる法則の存するを承認するに吝なるものではない。その法則は若しも社會民主主義が農村に於て有效なる活動を爲さん

31) Cohnstaed, S. 221 ff.

が爲めには、よく之を研究し又尊重せねばならぬ所のものである。されば大會は黨の理事者に委託するに、獨逸國內の農業實狀を精査し之を一の報告書に綴るに適當なる人々を選任せんことを以てするものである。といふ意味のものであつた。

こんな反對決議案が出た位だつたからプレスラウ大會はまことに賑かなことで、討論には花がさいた。そして色々な人が賛否色々な議論をのべたが、中にもグヴィッドは農政的な自説を支持して原案を衛り、特にベーベルは原案維持者として主なる役目を働いたのである。然しベーベルは自作農民が其地位を保持し得べきことを約束し得るものではなく、その無產者化はこれを阻止し得べきものでないとの信念を變じたのではなかつた。

併しプレスラウ大會に出席した人々の多數は、農民の獲得といふことを以て委員會案の中心核子を爲すものと見んと欲したのであつて、社會民主黨がたゞ労働者の政黨たるに止まるか、それとも進んで小自作農民の政治上の代表とまでなるかといふことが、根本的な大問題であつた。

此事についてはリーブクネヒトも所見を明かにしたのであつて、彼は、今當面に横はつて居る問題は、決して理論上の問題ではなく、實行と政略との問題であるとした。そして彼は何人も小經營が資本的な大經營に對して永續的に其地位を保ち又繁榮し得べしとは信じないのだと述べ、吾々社會黨が農民に對して何程の助けを爲し得るかにについては、十分これを明かにせなければなら



ぬが、吾々は自作農民に對して彼等が所有者として確保し能はない所の彼等の生存を樂くにしてやらうと欲するものであると説いた。

シェーランランクも亦吾々は最早工業労働者のみの黨派たることは止めたのである。社會民主黨はあらゆる無產者の被抑壓者の黨派である。あらゆる階層の受難者の黨派である。プログラム案の反對者の行はんとする政略は純粹なる工業労働者の政略たるに外ならぬといふ意味の意見をのべた。

此等に對してはカウツキーは飽迄反對意見を戦はしたのであつて、彼は、農政綱領案は實に農民に對して吾々が都市の労働者にはこれを保障せぬ所のものを保障せんとするものである。即ち彼等の經濟上の存在の確立といふことこれなりと喝破した。そして彼は、若し吾々が農民保護の爲めに積極的に行動せなければならぬ必要に迫られてあるならば、そこにはたゞ國家社會主義が残されてあるのみである。然かも農政委員會は其道を選んでしまつた。しかし吾々はそれを批評せうとはしない。同様に又吾々はそれに服従するを要しないのである。だから諸君は私共の提出した決議案の方に賛成して下さいと結んだ。

大會の出席者の多數はカウツキーを支持し、其決議案が採用せられて、委員會のプログラム案は排斥せられることになつた。そして獨逸の社會民主黨は依然として労働者の政黨として立つて

行くことになつたのである。

仍て振り返つて一八九四、五年に於ける獨逸社會黨内に農政に關する論争の渦の捲き上つた時期を通覽するに、常に陰約の中に動いて居た強い感情は、吾々社會黨たるものは飽迄無産者政治を實現せなければならぬ。吾々の立場や政見に水がうめられてはならぬ。若し農民を吾々の陣營中に引入れるならば、吾々の立場はぐらついて來吾々の見地は傾いて來ることを恐れる。小經營とか大經營とかいふ問題は吾々に取つては實はどうでも可いのだ。吾々は飽迄階級政治を行はねばならぬから、吾々は飽迄階級的政黨であらねばならぬといふ感情だつたやうである。

上に示す所は一八六〇年代に農政問題——寧ろ對農民問題が社會黨内部に於て實際的な意義を有するやうになつて以後、農政問題が其高潮に達した、一八九五年のプレスラウ大會に至るまでの間に於ける状況の大様である。そして舞臺は獨逸を中心にして觀たのだが、それは獨逸がマルクス主義の本場である關係からまことに止むを得ないことであつた。そしてマルクス主義が指導的勢力を占めて居る所では、どの國でもこの問題に關する社會黨の態度は大體同様だつたのである。

その後獨逸に於ても農村問題に對する社會民主黨の態度に大した變化はなかつたが、世界大戰

に依る大いなる事情の擾亂と露西亞に實現せられたる勞働者と農民との共同運動による革命の成就とは、少からず諸國の社會黨の對農民態度に變化を生ぜしめることになつた。そして近狀に於ては社會黨は大いに力瘤を入れて農民獲得運動に努めつゝあることは、人のよく知る通りである。そして又獨逸の社會民主黨は大戦期の終以來實際政治上の實權を握つてしまつたし、又英國の勞働黨も一度は既に内閣を組織するやうにもなつて、何れも實地政策を行ふべき責任ある地位に立つことになつたものだから、農民及農業に對する態度はよほど實際的になつて來たことは又著明なる事實である。そして今や獨逸の社會民主黨も各々農政上のプログラムを議定して種々の實地政策を掲げて居るし、英國の勞働黨も亦これを公示して居る有様となつた。然かもその農政綱領について見れば、英國のそれは土地國有制を旗印にはして居るけれども、それでも農業用自作地の所有制を承認する例外を認めて居るのみならず、農業勞働者の保護に關する規定、その住家政策、農產物販賣組織改善方策、農業金融制度改善策、農業保險、農村教育等のことに關して細かい實行的政策を掲げて居る。曾て獨逸の社會民主黨が斯くの如きは農民黨や改良主義者の爲すべきことで社會黨の關知する所ではないとし、之を爲すを以て潔しとしなかつたやうな實行的政策が掲げられるやうになつてしまつた。

又これを奧太利及獨逸の社會民主黨についてみるも、その農政プログラムは英國勞働黨のそれよりも穩和なもので、やはり農村教育の振興、穀物專賣制の提唱、産業組合の奨勵、土地價格の

制理等のことについての實地方策が示され、又農業労働者の保護、農業労働保険に關する立法、家産制定、労働者の自作的農業經營、地方自治體の土地所有の擴大等のことが實行上の政策項目として示され、何れについても其方針が具體的に示されて居る。<sup>33)</sup>その示す所は曩にプレスラウ大會に於て頭から叩き壊された農政委員會のプログラムよりも或は更に一層改良主義的なものであるかも知れない。大體に於てダヴィッド一派の所論を容れて其根柢の上に築かれたるものと見て差支ないものである。

こんな風に最近に至つて社會黨の態度の變つて來たことは、この問題の研究者に取つては最も注目値する所と謂はねばならぬ。そして古いマルクス主義的な對農業見地から斯くの如き農業政策的見地に推移して來るについては、露西亞に於ける革命の實驗が最もよい手本を示したこと、は言を俟たざる所である。露西亞に於ける對農業方針の變化については私は度々本誌上にも紹介して置いたから、<sup>34)</sup>茲に又これを繰返し説明する必要があるまい。尙ほブハーリンが農業問題について爲した演説(一九二五年四月)や其示して居る農民に對するテーゼなどを見れば、<sup>35)</sup>露西亞に於て現今如何に自作農民に對して其の經濟的地位の獨立の保障が約束せられ、彼等の心を捕へて自家藥籠中のものと爲さんとする努力が、政權實行上樞要の地位に在る人々の間に爲されつゝあるかを知ることが出來るであらう。要するに社會黨は自作農民を獲得しないでは居られないのである。

33) 拙稿『獨逸社會民主黨の農政綱領』(本誌第二十五卷第三號)參照  
34) 拙稿『勞農露國の農業』(拙稿『農業社會主義と組合社會主義』中に收録一本誌第二十五卷第六號所載) 拙稿『露西亞の新經濟政策と農業』(本誌第二十四卷第二號及三號所載)  
35) N. Bucharin, Ueber die Bauernfrage, Berlin 1925.